フンボルトペンギンの胆管細胞癌

日本獣医畜産大学家畜病理学教室出題　第19回獣医病理学研修会標本No.309

動物：フンボルトペンギン(Spheniscus humboldti)，雄，10～15年，体重3.6kg，東京都井の頭自然文化園において飼育されていた。

臨床事項：1978年10月8日朝，ペンギン舎付設のプール内で死亡していたもので，とくに変った臨床症状には気がつかなかった。

肉眼的所見：外景では，緑白色便が肛門周囲の羽毛に少量付着していたが，他にはとくに変化なく，栄養状態も普通であった。内景では，肝臓と直腸に著変が認められた。肝臓は暗赤褐色を呈し，重量110g(体重比3.06%)でほぼ正常と思われたが，左葉壁側面尖端に腫瘤が1個認められた。この腫瘤は，2.0×2.0×1.7cm大で，汚れた白褐黄色を呈し，硬固感があり，脆弱で，かつ肝組織から容易に離脱しやすかった。腫瘤の割面の色彩および硬度は，表面と同様であった。提出標本はこの腫瘤である。直腸では，直腸下部から総排泄腔への移行部に，古い潰瘍病巣が認められた。この部位は肥厚して腸管腔を狭窄していたが，便の通過障害はとくになかったものと思われた。他の臓器には，異常は認められなかった。

組織学的所見：肝臓では，腫瘤部位に明瞭な多数の小管腔構造が認められた。管腔をつくる上皮細胞は，概ね大型立方形で，好塩基性細胞質をもち，著明な異型性を示す癌細胞であった。管腔内にはエオジン好性，PAS陽性，アルシアンブルー陽性を示す物質がみられ，これらは酸性粘液多糖類と考えられた。癌組織は結節性で，周囲の肝組織との境界は比較的明瞭であった。しかし，この部位においては被包の形成は認められず，癌細胞の浸潤性増殖像およびリンパ球の増数が認められた。癌組織間質には，結合組織が比較的多量にみられた（写真1，HE，×200，写真2，HE，×400)。直腸下部から総排泄腔にかけてみられた潰瘍は，慢性経過をとった腸炎の像を呈していたが，この部位には腫瘍病変は認められなかった。なお，他の臓器にはとくに病変は認められなかった。

以上の所見から，この癌組織は肝臓原発性と考えられるが，さらに胆管細胞癌と肝細胞癌の管状型との鑑別が問題となった。事実，両者にはしばしば鑑別困難な例が見受けられ，現在なお判然としない部分もある。本例の場合は，好塩基性細胞質をもつ癌細胞が，典型的な多数の管腔を形成しており，その管腔内には酸性粘液多糖類が証明され，かつ癌組織間質には比較的豊富な結合組織が認められた点，ならびに電顕的に，癌細胞の細胞内小器官の像が肝細胞のものとは若干異なった点などを重視し，本例の肝臓病巣を胆管細胞癌と診断した。